

第 11 回「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録

◆日 時 平成 30 年 2 月 9 日（金曜日） 午後 3 時 30 分～午後 4 時 45 分

◆場 所 仙台市役所上杉分庁舎 12 階 教育局第 2 会議室

◆出席委員

氏名（敬称略）	所属 職名	備考
荒井 崇	東北大学大学院教授	
板垣 信哉	宮城教育大学特任教授	委員長
大泉 晶子	前仙台市 PTA 協議会監事	
大草 芳江	(有) FIELD AND NETWORK 取締役	
亀倉 靖宏	仙台市立上杉山中学校長	
今野 和賀子	東北福祉大学准教授 (前仙台市立錦ヶ丘小学校長)	副委員長
佐々木 守世	(株) ホームセレクト代表取締役	
針生 真由美	仙台市 PTA 協議会副会長	
宮本 真由己	住吉台中学校区学校支援地域本部 SV	
杉山 勝真	仙台市教育委員会学校教育部長	(欠席)
佐藤 淳一	仙台市教育委員会学校教育部参事	
猪股 亮文	仙台市教育委員会教育指導課長	(欠席)
三塚 修	仙台市教育センター所長	(欠席)
春日 文隆	仙台市教育委員会学びの連携推進室長	

◆傍 聴 なし

◆報道関係 なし

◆配布資料

- ・次第 ・第 10 回議事録（資料 1）
- ・仙台市確かな学力育成プラン 2018 策定スケジュール（2/9 版）（資料 2）
- ・仙台市確かな学力育成プラン 2018 中間案・最終案 対照表（資料 3）
- ・仙台市確かな学力育成プラン 2018 最終案（資料 4）

◆会議の概要

1 開会

2 委員長挨拶

3 報告（事務局）

(1) 議事録について（資料 1）

(2) 今後のスケジュールについて（資料 2）

- ・この委員会以降の修正は、委員長の預かりで調整する。教育長への報告については、日程を調整し、委員長が行う。

4 協議事項

- ・委員長より、署名委員を今野副委員長に指名。

(1) 最終案について（資料 4）

- ・（事務局）資料 3 は、中間案からの変更点を示したものである。赤下線部分は、項目名等を変更した部分、灰色網掛け部分は、新規の部分となる。該当箇所は、資料 4 を参照されたい。

本プランの名称の変更について、これまで前プランの名称を踏襲して「確かな学力育成プラン 2018」としていたが、他都市でも同様のプランを策定しており、本市のプランであることを明確にすることから、名称を「仙台市確かな学力育成プラン 2018」とする。

全体的な構成としては、中間案、最終案とも 4 章立てとしているが、中間案の第 3 章にしていた「児童生徒の学力等の現状と分析」を最終案では第 2 章に組み込んだ。それに伴い、中間案第 4 章が最終案では第 3 章に繰り上がっている。最終案では新たな第 4 章として「計画の推進体制」を加えている。この件については、後ほど触れる。

資料 4 より巻頭に新たに「はじめに」を加えている。前回の検討委員会で、また、パブリック

コメントや常任委員会、定例教育委員会でご意見いただいた多忙化や環境整備の点を踏まえ、三段落目では「各学校が目指す児童生徒の育成や課題の解決に向けて、必要な施策に重点的に取り組み」と記述した。四段落目では、「教員の多忙化に拍車がかかり、子供と向き合う時間や授業準備に充てる時間等が不足する状況」「教員の環境整備等も同時に図っていくことが重要」という内容を記述している。

第1章では、《第2期仙台市教育振興基本計画における位置付け》の部分を割愛し、4ページの内容を1ページにまとめた。

第2章では、先に触れたとおり、中間案の第2章と第3章、更に第4章の一部「「確かな学力育成プラン2018」における策定の主なポイント」を含めた14ページほどの内容を整理して12ページにまとめた。PISA、TIMSSといった、「世界的な学力調査から」は、必ずしも仙台市の状況を示しているものではないことから、削除している。

2ページに(4)「複雑化・多様化する学校課題」を追加した。「はじめに」とも関連しているが、「長時間勤務の状況」「教員の業務負担の軽減を図ることが大きな課題」と記述している。

4ページに(5)「人的・物的な体制の確保」を追加した。新学習指導要領の考え方も踏まえ、また、先の学校課題の複雑化・多様化（生徒指導や特別支援教育等）を受け、「学校や教員だけでは十分に解決することができない課題も増えて」いることから、地域との連携や専門スタッフの配置などを念頭に置いて、「必要な指導体制及び環境整備に努めていくことが大切」と記述している。

9ページに図14「朝食を毎日食べる」「朝食を食べずに登校することがある」のグラフを挿入した。

10ページに図16「生活規律にかかる質問」のグラフを挿入した。

12ページに図21「国語、算数・数学の勉強が好き」「授業で学習したことが将来役に立つと思う」のグラフを挿入した。

中間案では、「確かな学力育成プラン2018」における策定の主なポイント」としていたが、「教育環境の現状」として記述している。

12ページに(1)「幼児期からの切れ目のない教育の推進」には、パブリックコメントや前回の協議で触れた「遊び」の点を踏まえ、三つ目の○として、「幼児期の遊びや生活を通した学びや育ちは、小学校以降の教育や生涯にわたる学習の基盤となる」という内容を追加した。

13ページに(5)「地域・家庭と連携した「学校における課題」の解決」を追加した。4ページの「人的・物的な体制の整備」の視点を踏まえ、「地域・家庭との関係をより充実したものにすることが期待されている」と記述している。

第3章では、中間案の第4章のうち、新たな第2章に組み込んだ一部、新第4章に組み込んだ「確かな学力の育成に向けての指標」を除き、第3章に繰り上げた。41ページが39ページとなった。

A～Fの各領域の個別の事業では、③「今後の方向性」が内容的にやや少なめで、表記も統一されていなかったが、記述を見直し、核となる内容を枠囲みで箇条書きとすることとした。

23ページの(6)「小学校中学年算数サポート事業」は、内容は変わっていないが、中間案ではB「指導体制の充実」領域の事業としていたが、以前、指摘を受けていたことから、A「教育指導手法の充実」領域に移動した。

新たな第4章では、旧第4章「確かな学力の育成に向けての指標」を「計画の進行管理」として移動、更に教育振興基本計画に倣い、新たに3項目を追加した。2では「地域や企業等関係機関との連携・協働の推進」の視点、3では今後5年間で計画期間となることから「課題やニーズに応じた的確な対応に努める」こと、4では「ホームページ等による情報の発信」について触れている。

中間案の巻末には、「確かな学力育成プラン」の全体像及び、「幼児期からの切れ目のない教育活動の推進」の図を入れ、プラン全体を俯瞰できるようにしていたが、今後5年間の計画期間の中で部分的に変わってくる可能性もあることから、最終案には入れずに、研究会等での説明用として活用する。

巻末には、本検討委員会に関する資料として、委員の名簿、これまでの協議の経過、設置要綱を追加している。特に、名簿について記載に誤りがないか、確認をお願いしたい。

プラン全体の表現について、これまで前プランを踏襲して「～である」調で記述していたが、

広く市民の方がご覧になるということを踏まえ、「～です・します」調に変更したいと考えている。今後、事務局で修正する。

- ・(委員長) 資料3, 新たに加わった部分について御意見を伺いたい。パブリックコメントに対して委員会で協議を重ね、最終案となっている。
- ・(亀倉委員) 説明された部分について確認したが、分かりやすくまとめられている。
- ・(春日委員) 前回、大草委員から「遊び」について大きく取り上げてほしいという意見をいただき、小学校入門期だけではなく、それ以降の学びとして、少し大きく取り上げては、という提案があった。学習指導要領の前文には、幼児教育における学びは、学びの本質であり、生涯にわたる学習とのつながりを見通すものと打ち出されている。そこで、最終案の31ページのCの二つ目の丸印の部分のような位置付けとした。
- ・(委員長) この補足意見も踏まえて、意見があればお願いしたい。
- ・(佐々木委員) 13ページ(5)の地域・家庭と連携した「学校における課題」の解決について、分かりづらいため、説明してほしい。
- ・(春日委員) 地域と家庭と連携するということは、学校支援地域本部に代表されるような、子供たちの豊かな環境づくりということで進めてきた。しかし、昨今、学校だけでは解決が難しい、いじめや不登校といった諸問題についての解決を考えた時、49ページに取り上げているように、学校支援地域本部を生かした形で、コミュニティ・スクールの導入を検討することも考えられるので、(5)を設けた。学校における諸課題を学校と地域とが連携しながら解決することが求められることから、このような項目名とした。
- ・(委員長) 亀倉委員に学校長の立場から意見をもらいたい。
- ・(亀倉委員) 教育委員会として、大切なポイントとしておさえているが、学校としても、保護者や地域にお願いするところや家庭や地域と一緒に取り組むところがあるかと思うので大切な項目であると認識している。
- ・(委員長) 宮本委員に意見を伺う。
- ・(宮本委員) 最終案は、より分かりやすくなっている。先生方の仕事量が多いことに関しても、改善する視点が2ページや4ページに入っていてよい。
- ・(大草委員) 遊びの件について、3ページにあるように、「確かな学力を育成する上で前提となる環境の整備」の一環として、生涯にわたる学習とのつながりを見通す取組として位置付けてもらった。「小学校中学年算数サポート事業」を中間案ではB「指導体制の充実」領域からA「教育指導手法の充実」領域に移動したことについて、補足説明をしてほしい。
- ・(春日委員) 前回までの案では、「小学校中学年算数サポート事業」に放課後等に補充学習をする場合、人員を配置するという内容も入れた記載をしていた。最終案では、人的サポートの側面については、放課後等学習支援事業の中に入れ、その部分については、そのまま、B「指導体制」としている。また、小学校中学年算数サポートについては、指導方法に関わる部分だけとなったので、Bの「指導体制」からA「教育指導手法の充実」に入れることとした。「指導体制」と「人的サポート」二つの要素を分け、整理したところである。
- ・(委員長) 整合性をより高めるためにA「教育指導手法の充実」に移動したということである。
- ・(大泉委員) 最終案について、全体的に見やすくなり、まとまった。また、先生方の負担軽減と子供を学校任せにしないという視点から、教育が家庭生活と学習状況との関わりの方表があり、良いものに仕上がっている。少人数指導など、教育指導手法も具体的に明記されている。遊びから学びへのつながりについて、幼児期から中学校3年生までトータルで教育プランが確認できる。モデル事業がスタートすることもよい。プランをどのように具体的に進めるのか、先生方の負担軽減等の問題について具体的にどのように進めていくのか具体化するとより充実したプランとなる。
- ・(委員長) 大泉委員からは、53ページの計画の推進体制について、述べてもらったが、推進体制の進行管理、検証、担当は学びの連携推進室ということでのよいのか。
- ・(春日委員) 学びの連携推進室が担当するが、事業によっては、他課にも関わるものもある。また、仙台市標準学力検査等を成果指標として、進捗状況を管理していくものもある。
- ・(委員長) 担当課を書く必要はないのか。
- ・(春日委員) 多岐にわたるため記載は難しい。各施策について、点検評価(「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価の結果報告書」)を市民の皆様に公表している。つまり、各施策につ

いて目標を設定し、どの程度、達成したのか年度ごとに公表している。それで具体が分かるようになっていて。

- ・(委員長)最後の章に関しては、市政全体の点検評価にこのプランの進行管理が埋め込まれていることとなる。
- ・(荒井委員)人的・物的体制の確保であるとか、地域・家庭と連携した問題解決について明示したということは、現場の先生方にとっては、安心材料となる。また、これからやるべきが増えるものの、時間確保については、委員会や校長等が配慮するものと思われる。TIMMS についての記載が削除された点については、全体のボリュームや現場の先生方が読むことを考えるとやむを得ない。TIMMS は基礎的な知識、PISA は応用力を問うものとなろうが、PISA は3年ごとに内容を変えていて、今回は、協同問題解決能力に関する項目が新たに入り、世界経済の動きを踏まえた上での能力測定を行っている。来年度の PISA については、プランで触れないまでも、教育委員会で結果を分析し、手を打てば、文科省の先取りとなるのではないか。
- ・(委員長) PISA、TIMSS の動向については、どの部署でどのように課題を把握するのか。
- ・(春日委員)学びの連携推進室で、全国学力・学習状況調査や仙台市標準学力検査に世界的な調査を含めて総合的に分析をしていく。
- ・(委員長) PISA、TIMSS については、プランに記載がなくても、仙台市として分析する手立てと組織を整理し、分析結果は、常時、プランに活かされていくということになる。
- ・(副委員長) 17 ページ以降の A から F のそれぞれのねらい、成果、今後の方向性の書きぶりが統一された。根拠となる資料もわかりやすく載せられている。今後の方向性も具体的で見やすい。今後の方向性の中で、平成 30 年度以降、年度が示されて、具体的な方向性が示されている部分とそうではない部分とがある。これは、すぐに着手できるものと段階的に進めていくものとの区別を意識して書いているのか。
- ・(春日委員)年度ごとのロードマップの形で目標があるものについては、プラン期間内の事業計画が決まっており、事業の進捗がおおよそ示せるものである。一方、これまでも実施している事業については、成果指標として示しているものもある。例えば、18 ページの確かな学力研修委員による提案授業・授業力レベルアップ研修の今後の方向性については、これまでの取組をより充実させるということで、項目ごとの書きぶりとなっている。また、21 ページの学力サポートコーディネーターもすでに取り組んでいる事業であるが、図に示したサイクルを意識して進めていくものである。事業の特色に応じて、目標を表現している。
- ・(針生委員) A から F について、それぞれきちんとしたねらいがあり、内容の整理がされ、統一感がある。これから様々な課題の変化があるだろうが、よい実践を通して、それがどのような成果となったのか検証し、それを活かして今後も新プランを計画していくのだろう。地域、家庭、学校が連携する取組について、今後、ますます良い形で、目標を持って取り組むことができればよい。
- ・(委員長)第1章と第2章をコンパクトにすることで、良い形となった。ここで、全体を通しての意見・感想を伺う。
- ・(亀倉委員)最終案は、この検討会議での話合いの内容が反映されている。「です・ます」調に変更する件についても、市民の皆様が読まれることが意識されている。まだ、表記の揺れが見られるので、事務局での修正を望む。
- ・(佐々木委員)内容的に見やすくなった。一人でも多くの先生方が読み、実践に移すことで、学力向上や教員の負担軽減につなげてほしい。
- ・(針生委員)本プランは、様々な視点から考えられて作られている。より多くの方々に理解してもらいたい。地域連携として、保護者ができること、先生方ができること、それぞれできることで子供たちをサポートするのが理想的である。
- ・(宮本委員)ここまでまとめるに当たって、教育委員会の苦労があったと思う。本検討委員会の議論に参加し、多くを学ぶことができた。ところで、教員を目指す学生も本プランについて知る機会があるのか。
- ・(春日委員)本市の教員を目指す学生は、本プランなどに目を通して、本市の教育施策を頭に入れて教員採用試験に臨むはずである。
- ・(宮本委員)学校支援地域支援本部の視点から言うと、現場の先生方の理解が得られないことがある。地域の方の多くが学校の中に入っているということ、より多くの教育に携わる方々に理解しても

らいたい。その理解の上で、学校・地域・家庭が手を取り合っていければよい。

- ・(委員長) 4月に各学校に本プランを配付し、web上にも掲載すると思うが、その他に周知する手立てはあるのか。
- ・(春日委員) 本プランの本編を各学校に配付するとともに、ダイジェスト版を全職員に配付する。また、各学校で目的に応じて、どの施策に取り組むのか理解をより深めてもらうために、要請があれば、学校へ出向いて本プランについて説明する、サポート訪問の実施を検討している。機会を捉えて、本プランについてアピールしていきたい。
- ・(大草委員) レイアウトで気になる点について指摘したい。全体的には、構成がきれいになっている。第3章の見やすさに比べると、第2章が分かりにくい。原因は、図のはみ出しが見られるためであり、一見して構想が分かりにくい。読み手のモチベーションにも関わることであることから、図の整列や色の付け方に規則性を持たせると、読み手に伝わるものとなるのではないかと。
- ・(委員長) 第2章の3は、本プランの基礎的データを示している。見やすさを考慮して、レイアウト等を再検討してほしい。
- ・(春日委員) 最後まで検討していきたい。
- ・(大草委員) 全体的な感想として、本検討委員会等で議論することで、学校教員、教育委員会、保護者、地域の方が教育に対して自分のこととして捉えて、考えたり、努力したりしていることが感じられる。テレビ等の影響で教育委員会に対する誤解も見られるが、実際は、教育委員会、学校現場の教員や地域の方が一生懸命に取り組んでいることが分かると、当事者意識を持って何かしようという気持ちに自然となるはずだ。本プランの周知をするに当たって、サポート訪問等をして直接コミュニケーションを図りながら周知することだったが、様々な方々を巻き込んでいくような取組をしてほしい。
- ・(大泉委員) 本検討委員会に参加したことは、貴重な体験となり、様々な立場の方々と議論したり、様々な考えを知ったりすることで勉強となった。本プランも委員会で出た意見が反映され、また、見やすいものとなった。退職した教員にも目に触れるようにして、本市の子供たちの現状や学校支援地域本部等の学校と地域が連携して子供たちを育成している取組について周知できるとさらに良いものと思われる。
- ・(荒井委員) すばらしいプランができたと思う。前回のプラン作成にも携わったが、このようなプランの作成は、本当に大変であったが、前回同様に、今回のプランも教育委員会は、苦勞してこだわって作成したのと感じる。そこまで努力して作り上げたのは、子供たちを何とかしたいという熱い思いの賜物であり、プランについて説明する際には、その熱意も伝えてほしい。
- ・(副委員長) 前回のプランから9年が経った。今回、新たな形でプランを送り出すに当たり、これまでの成果と課題をもう一度振り返る好機となった。学校支援地域本部、仙台自分づくり教育、協働型学校評価等、様々な取組がどのような意味があったのか、これからどのような形でそれらを広げ、深めていけばよいのか、もう一度考え、そして、今後5年間で具体的にどのような方向性で進めていくのか、改めて考える大変良い機会となった。このプランが絵に描いた餅とならないように、学校現場はもとより、市民の皆様にも広く理解してもらえよう、そして、進行管理をしっかりして発信していければ、更に発展していくものと思われる。
- ・(委員長) 56ページの本検討委員会の協議経過を確認してみると、約20か月、つまり、約2年弱が経過したこととなるが、本プランをまとめる難しさを改めて実感させられた。特に社会の変化を見据えながら、学力を捉えるのが難しいと感じた。委員の皆様のご協力には感謝を申し上げる。

(2) その他

- ・なし

5 事務連絡(事務局)

- ・議事録のデータをメーリングリストで送付する。
- ・議事録は、今野副委員長が署名し、公表する。
- ・プランの最終案について、語尾やレイアウトの修正については、委員長が確認し、決定とする。概要版も同様である。教育長への報告も冒頭で説明したとおりである。

6 閉会

平成30年3月15日

署名委員

5

今野和賀子(印)